

成人向

FOR ADULT ONLY

処女は
いかに
捨てた

試し読み用

処女は PVP で捨てた
体験版

四条



目次

一. 処女はPVPで捨てた	5
二. 処女はコモドで捨てた	33
三. 首はホワイトデーで捨てた	57
四. 財産は女で捨てた	84
五. 涙は少女時代で捨てた	105
あとがき	134

一. 処女はPVPで捨てた

ここはプロンテラの対人戦^{PVP}ルーム、ヨーヨーモード。

「お前がウムガⅡフムタンか」

お店でよく指名しているプリーストのコに呼び出され、何だろうと足を踏み入れた俺を待っていたのは、長い黒髪を悪魔のヘアバンドで飾った女聖騎士^{クルセイダー}だった。

「そうだ。アンタ誰だ？」

女は不敵な笑みを浮かべた。

「プロンテラ騎士団・女性犯罪課担当、クリスⅡエルハートだ」

「女性犯罪課のクリスちゃんか、俺に何の用かな？」

女は少しムツとして、陰のある声で言う。

「馴れ馴れしく呼ぶな。今日はプリースト嬢の届け出により、調査室へ連行するためにお前を呼んだ」

プロンテラ騎士団の調査室。

俺に心当たりはないが、犯罪者が行くところだ。どうやら俺の首にはお縄がかけられているらしい。

ごくりと唾を飲み込み、女に悟られないように、拳に装備しているフィストの感触を

親指で確かめる。

「なんで俺が騎士団なんだ？」

「貴様、修行僧^{モンク}のクセに、女の子におさわりする店で本番を迫った上にお金を払わなかったそうじゃないか」

「な、何故それを！……つか、それはちょっと違う。プリちゃんが誘ってきたのに、本番は違反だったって店から賠償金をふっかけられたんだ。だから逃げた」

「アホ。風俗で女が誘ってきたら罠に決まってるだろ」

当然のごとく言い張るクルセイダーに俺はビビった。

「わ、罠だって！ ちよっと待て、それ被害者はむしろ俺じゃね？」

「無論だ。しかし、店の規約を破った上に金を払わないのも明らかに犯罪だからな。逮捕せざるを得んなあ」

「んな……国を守るプロンテラ騎士団が、そんないい加減でいいのかよ！」

クリスは俺の言葉に臆することなく、笑っている。

この女、長身のうえに態度がデカイもんだから、背の低い俺はかなり圧迫感を感じる。

「騙されるお前がアホなのだ。だいたい、この街の女がブサイクなウンバラの男を相手にするはずがなからう」

「な、なぜウンバラだと分かった」

「そのふざけた名前でバレーバレだ」

女はニヤリとして言った。

「ともあれ、死体にしてもお前を連れて行けば、私の今日の任務は無事に終了だ」

「死体につて……お前」

俺は呆れた。

俺やコイツのように冒険者になれば、ブリースト リザレクシオン聖職者の蘇生術やイグドラシルの葉で生き返る

ことができる。

確かに死体にして連れてっても生き返らせればいいけどさ……言ってることひどく

ね？

女は背負っていた槍をずりりと引き出す。

刃先が三つに分かれたトライデントだ。

その刃の異常な輝きから、過剰鍛錬だと分かる。おそらく対人戦用の特化武器だろう。

クリスは巨大な槍を軽々と構えると、殺意に満ちた瞳で楽しそうに笑った。

「このPVPではな、勝てば官軍だ。私を倒すことができたら、オマエを見逃してやろ

うじゃないか」

やっべ、こいつ本気だ。

俺は後ろに飛び退いて適度な間合いを取る。

コイツの雰囲気からして、こういう対人勝負は場数を踏んでそうだ。だが俺は、ぶっちゃけPVPとかやったことねえ。さて、どうするか……。

女が先に動いた。

「チビ黒サ○ボはウンバラに帰れ！」

クリスが叫ぶ。見事な挑発。プロボック

ウンバラではイイ男だった（と思う）が、この国では黒くてチビでブサイクらしいのは事実だ。

ムカつく！

が、まずい。怒りは防御力を半減させる。

「気功!!」

俺は精神を集中させ、全身の気を練る。

「スピアクイッケン!!」

奴は槍を両手で構え、少女がボタンでも回すかのような身軽さで振り回しながら襲いかかってきた。

俺はギリギリのところでそれを見切り、次々に繰り出される攻撃をかわす。風を切る音とともに、研ぎ澄まされた切っ先が周りの空気をかすめていく。

やべえな、かなり速い。

「三弾掌!!」

一度に三発のパンチを繰り出す。

モンクが重い武器を持たずに拳で戦う利点。それは素早さに尽きる。

一発、なかなかいい手応えがあった。

「連打掌!!」

続けて二発、三発。

ガッ。

一発が鈍い音を立てて、クリスの顔面に命中した。

やべ、女の顔殴っちまった!

俺は思わず我に返って慌てたが、クリスは全然気にしてない様子で、血の混じった唾液を男らしくペツと吐き出した。

それも女として何だかなあと思ったんだが、出したのは血だけじゃなかった。白い小さなものが転がってた。

うわっ……歯だよ!

俺はゾツとした。

こ、こいつあ女じゃねええええ!

「どうした、随分と攻撃が弱いようだが?」

思わず距離を取った俺に、クリスが切れた唇の端をぬぐいながら嘲笑する。くっそ、遠慮は無用ってことか？

早さには自信があったが、拳と槍じゃ攻撃力が違いすぎる。おまけに射程距離長くなえ？

こっちも遠距離攻撃でいくか！

「指弾!!」

「させるか！ バッシュ!!」

あっさり和一撃で詠唱が妨害された。

しかも麻痺スタンきた！ 目から星が！ う、動けねえ！

衝撃でクラクラしていると、雨のようにクリスの槍が降ってくる。

ウワアアア、ちょ、ちょ……待っ……。

ズガガガガガッ。

麻痺スタンが解ける頃には、俺は蜂の巣になって寝ていた。

「なんだ、これで終わりか」

クリスが呆れた声で言う。本気でガッカリしたようだ。

こ、こいつ、楽しんでやがる。

「くく……娯館での揉め事というから、どんな腑抜けが来るのかと思ったが、やはり腑

抜けだったな」

いかん、身体が動かかねえ。こりやおだぶつか？

「うう……プリちゃん……すまねえ、俺は負ける……」

いつも俺を癒してくれた、娼館のプリちゃんの可憐な笑顔が浮かぶ。親の借金を返すために身を落としたという可哀相な子だった。甘えられて三百万^Mゼニーを貸したこともあったっけ……。

回想に浸る俺に、クリスの冷たい言葉が突き刺さった。

「まだ分かんのか、オマエは騙されたんだよ。オマエが貢いだ金は別の男に貢がれているさ」

な、なんだってえ！

クリスは心底楽しそうに言った。

「ついでに言えば、そのプリちゃんは歳をごまかしていてなあ、本当の年齢はさん……」

「ぎゃー！ 男の夢を壊すなああ！ 鬼めえええ！」

俺の身体に怒りが湧き、気力がみなぎる。

「女でも許せねえ！」

「私に負けた奴は皆そう言うさ、女だから手加減をしてやったとな」

俺はよろりと立ち上がると、気を再び練り直す。

「気功!!」

「まだやる気か？ 面白い」

俺は低い声で言った。

「残念だが、これで最後だ……爆裂波動!!」

クリスは余裕の笑みを浮かべている。

「ほう……それが来たということは、次は阿修羅か」

バレてるし。

モンクのスキルなんてこんなもんだよな。

「阿修羅霸王拳!!」

俺は有り余る精神力の全てを込めてクリスを撃つ。モンクの必殺奥義だ。

黒い気を纏った拳が、聖騎士の鎧を打ち砕いた。

……かに見えた。が。

「オートガード!!」

「なっ……」

クリスが槍を盾に持ち替え、俺の阿修羅をガッチリ受け止めていた。鏡のように磨かれたミラーシールドの下から薄紫色の瞳が覗く。

「これで最後だったかな？」

な、何いい——！

あ、阿修羅霸王拳って防げんの!?

も、もう俺……打つ手なし……!?

「シールドチャージ!!」

クリスが盾を投げつけ、呆然としていた俺の顔面を弾き飛ばした。

俺は後ろに吹き飛ばされ、そのまま仰向けに倒れる。

「ぐっ……」

顔と背中が痛え。

く、くそ……空が青いぜ……。

クリスが槍に持ち替え、こちらへ来るのが見えた。

「うん、阿修羅も受けたし、楽しめたぞ。腑抜けなどと言って悪かった」

俺が起きあがれずに奴を見ていると、奴は薄笑いを浮かべて片足を持ち上げ、俺の頭をガツ、と踏んだ。

げ……頭踏まれた!?

チクシヨー!

こ、こんな奴に負けるなんて……!

と思ったが、奴を見上げた姿勢のまま、俺はギョツとした。

俺の視界には場違いなモノが飛び込んできていた。

……。

……あれっ……。

この角度、スカートの中が丸見え。

ひざ上の位置で留められたニーソックスや、白くて柔らかそうな太股、大事なところを包んでいる黒い下着がバッチリ見えていた。

「さあて、最後に言い残す事はないか？」

「……」

……く、黒のＴバック……。

丸みを帯びた恥丘のラインにピッタリ沿うように、布と言うよりは紐といった感じの小さい布きれが秘所を覆っている。

というか鎧の下になんでエロい下着つけてるんだ、コイツは!?

「……おい、聞いているのか？」

「……」

クリスの言葉も耳に入らず、俺はスカートの中を凝視していた。

恐ろしく面積の少ない下着だ……。

覆っているというよりは、食い込んでいるといったほうが正しいか？ アソコが下着

に収まりきってないというか、ちよつとはみ出てる気がするし。

黒い布地の下から、薄桃色の秘肉が……。

ハアハア……このままずっと眺めていたい……。

「……き、貴様ッ」

ゴッ、と派手な音をたてて、クリスが俺の頭を蹴る。

どうやら気付かれたらしい。

スカートの中の世界が俺の視界から去る。

「ま、待ってくれ！」

俺は這いながらクリスの片足にしがみついた。

「も、もう少し！ 頼むからもう少し見せてくれ！」

「は、離せ！ へ……変態めが！」

クリスが空いているほうの足でしげしと俺を蹴る。

しかし、俺を蹴るたびにスカートがめくれる訳であって、チラチラと黒下着が見える様子がこれまた……。

「このくらい何ともないぜー！ もっと蹴ってくれ！」

「ひっ……離せっ！」

よほど俺の態度がキモかったのだろう。

今までの冷静な態度はどこへやら、クリスはすうっと青ざめて槍で俺をゲシゲシと殴る。

俺はその槍の先を掴んで引き寄せ、逆に後ろに押して手を離す。

クリスはバランスを崩して地面に尻餅をついた。

チャンス！

とばかりに襲いかかったが、敵は手練れ、床に倒れながらもトライデントでぐっさりと俺を刺した。

腹に熱く重い痛み。

三つの刃が刺さっているのだから痛い。だが……。

「効かね——っ」

俺は槍を引き抜いてクリスに襲いかかった。

まだアレを見るまでは死ねない！

俺の身体の底から、信じられない程の活力がみなぎってきた！

「うおおおおお！ 息吹い!!」

俺は深呼吸をして、わずかな精神力を回復させた。

「イクぞおおお！ 寸勁!! 寸勁!! 寸勁!! 寸勁!!」

連続で強打をクリスに喰らわす。

「ぎゃー！」

突然の反撃に避ける間もなく、クリスは断末魔の悲鳴をあげ、あっさりと倒れた。

あれっ、勝ちまった。

まあいい、これで俺の好きにできるぜ……ふへへ……。

俺は動かなくなったクリスの上に馬乗りになる。

奴は青ざめた顔で喚いている。

「お、おい、早まるな！ 婦女暴行罪が上塗りされるだけだぞ！」

「勝てば官軍って言ったよな？」

「そ、それは言葉通りの意味では……って、触るな！」

俺はクリスのスカートを腹まで捲^{めく}りあげると、恥丘の感触を手のひらで堪能していた。

女の子らしい、温かくて柔らかな手触り。

鎧の下は可愛いもんだ。こんなエロパンツはいてるんだし、ちょっとくらい、イイよな？

俺は非常にムラムラしていた。場違いなエロ下着のせいかな？ こんな女相手だが、なんだか股間が大きく……。

「今さら無かったことに……なんて言わないよな？ 無実の俺を連行しようとしたんだしな？」

「無実じゃない！金を払わなかったのは……うあつ」

割れ目に沿って薄い布地の上から指でなぞると、クリスが喋るのを止めた。

俺の指には、べったりと湿った感触が返ってくる。

「なんだ、ビシヨビシヨじゃねえか」

「あつ……」

パンツの前側を思い切り引っ張ると、花卉に黒い下着が食い込んでいく。布が小さいから、吸いきれなくなった愛液が糸をひいて垂れた。

ははあ、さてはコイツ……。

「アンタ、PVP狂だろ？」

クリスは黙ったまま応えない。

「いやあ、対人戦って興奮するよなあ」

肌に密着させた下着の上から、少しふくらんだ突起をグリグリと指の腹でいじってやる。

「……ひあつ」

女がビクリと身体を震わせた。

「聖騎士様がPVPで下着を濡らしてるなんてねえ。俺、クルセイダーギルドにチクっちゃおうかなあ」

「や……やめろッ……」

「俺も被害者なのを知ってて、連行しようとしてたし」

「そ、そんな……元は私は依頼されただけで……ひっ」

なにか言おうとしたところで、敏感な部分を軽くつねってやる。

「うあッ……」

「ほら、否定しないのかな？」

食い込みを横にずらして肉芽を露出させ、今度は直接触ってみる。こういうのは強くやっても駄目だ、優しく撫でてやらないとな。

……ってお店でプリちゃんが言ってた。

「……や、やめ……」

クリスはその刺激に逆らえないようで、頬を赤らめ、苦しい吐息をついている。

「へへ……身体は嫌がってないようだぜっ……」

なんてな。

それにしても、尋常じゃない濡れようだな。

もう入れても大丈夫じゃね？

俺がズボンを下げて自慢の息子を取り出すと、クリスの顔が見る見る青ざめていった。

「な……っ！」

ぐったりしているクリスの顔に、そそりたつ男根をぺちぺちと叩きつける。

「さっき、俺のことをチビ黒サ○ボとか言ってたなあ」

クリスが顔を強張らせる。

それもそのはず、俺のアレはただものじゃない。

ウンバラの男はだいたいデカいんだが、俺は中でもデカいほうで。

まあ、その自慢の宝刀も使う機会が訪れない訳だが。

「これくらい入るよな？ 余裕だよな？」

「い、嫌あっ！」

「おやあ、クリスちゃんコレが怖いのかなあ？」

さんざんいじめたせいか、奴はすっかり逃げ腰だ。

「や、止めてくれ……それだけは……」

「聞かねえ！」

長くて細いクリスの足を開かせると、秘所にくいこんだエロパンツを指で引っ張る。

密で潤ったピンク色の花びらが開くのが見えた。

思わず俺の息子もますます元気になる。

勢いをつけて、俺は花園の中に侵入した。

「いっ……痛いっ……痛い！」

クリスが悲鳴を上げる。

……アレ？

なんか、グチャグチャに濡れてるのに、きつくて先っぽすら入らねえ。

く、くそ、早く入れてえのに。

俺は前後にゆっくりと動いて挿入を始めた。

ほんの少しずつだが、中がほぐれて入っていくような気がする。

でもなんか、相変わらずきついし、中でひっかかってる感じがするんだよねあ。

「止めろ、この下手糞！」

俺が前に動く度に、クリスが叫ぶ。

ここで止めたら男じゃないぜ！。

と思っていたら、ぷちん、と膣の中で何かが裂けるような感触があった。

何だ？ と思ったが、俺とクリスの結合部からじわりと血が滲んできたので俺は

ギョツとした。

えっ!?

……処女!?

「何だ……初めてだったのか」

クリスは涙目でキツと睨んできた。

「こ、この畜生！ だから止めろと！」

「こりゃー責任もって最後までやらねえと！」

「死ね、外道が！」

俺はクリスの罵声も流血も何のその、中に何度も出し入れしながら、少しずつ奥へと進んでいく。

「大丈夫、そのうち気持ちよくなるから」

「そんな訳あるか！ 貴様、エロ漫画の読み過ぎた！」

ええ……プリちゃんも最初は痛がってたけどな。

しかし、処女はきついな。

中は熱いし、締め付けてきて居心地は最高なんだが、奥まで入らねえ。ようやく半分つてとこか？

痛くて緊張してるから、余計に固くなってるんだよな。

そうだ。

こんなときこそ、あのスキルを使うときじゃねえ？

「気孔！！」

俺が精神を集中し始めると、痛みを我慢しているクリスが物凄く嫌そうな表情でこちらを見た。

「……糞っ、早く終わらせろ」

いちいちしゃくに障る言い方だな。
はっけい

「発勁!!」

俺の宝刀を通じて、クリスの内部に気を注ぐ。

「あ、熱ッ……」

クリスが俺の下でもがいた。

こういうスキルかというところ、固い物ほどダメージを与えられる。気の通らないものに気を流せるようにする効果だと俺は思っている。

俺はクリスの腰を掴むと、再び挿入した内部は熱を持っていて、驚くほど柔らかくほぐれていた。

「おっ、いい感じ」

膣内に肉棒を突き入れ、少しずつ出し入れしながら、ヌルヌルした粘膜の中を突き進んでいく。

クリスの体温が高くなっていて、いい感じに内壁が擦れてくる。

「く、くそ……」

段々として行ってるのが分かるのか、クリスが苦しげに呻く。

「うっ……」

ずんつ、と行き止まりに当たる感触があった。

まだまだきつい、全部入ったかな。よし、動くぞ。

クリスの太股を抱え上げて、ゆっくりと前後に動かす。

「ぐっ……」

クリスはぐったりとしていて、まだ時々痛そうに呻く。

でも、さっきみたいに悲鳴をあげるほどではなくなった。血も乾いてきたし。

中もきついというよりは、締め付けが凄くなった気がするぜ。膣の天井あたりがざらざらして絡み付いてくるような……これってもしや、名器ってやつか!?

くっそ、気持ち良すぎて腰が止まらねえ。

「あふっ……」

突然、クリスの声色が変わった。痛みを堪えるのとは明らかに違う、喜色の混じった声だ。

あれ……この声って……。

俺は力を込めて、奥まで突き上げる。

「んあっ……」

艶めかしい吐息とともに、クリスがビクンと跳ねた。

そのまま力強く、何度も身体の奥まで突いてやると、甘い吐息が段々と喘ぎに変わっ

ていく。

「あっ……嫌っ……あうっ……」

な、何だ、処女なのに感じてきたのか？

クリスが上擦った声で呻き、顔を反らせる。

「あふ……何か……良くなってきたあ……」

見ると、痛みでひきつっていた表情から情欲に染まった女の顔に変わってきていた。

頬は赤く、目はとろんとして虚ろに宙を見ている。

口の端から、涎が糸をひいて垂れた。

な、なんてエロい顔してるんだ。

戦闘時の鬼のような姿と全然違うな……。

「んあ……こんなの……凄いい……」

戦闘のときとはまた違う、楽しそうな声色で呟く。

うう、締め付けがいいせいでもう出そうだ……。

だが、もっとメチャクチャに突きたい！

俺は一度、ペニスを引き抜いた。

「あっ……」

クリスが惜しそうな声を出す。

そこを一気に奥まで突いた。

「あうっ」

びくん、と身体が跳ねる。俺はもう一度抜いて、再び奥まで貫く。それを繰り返していく。

「ひあっ」

一回の刺激が強いのか、クリスを入れる度に身体を震わせる。クリスの奥で、子宮口がヒクヒクしてるのが伝わってきた。

ずっと突いてるとコッチが出ちまうから休憩のつもりだったんだが、これはこれで反応がいいみたいだ。

「んう……」

クリスがこの挿入に慣れてきたところで、俺はわざとペニスを引き抜いて間をあける。奴が怪訝な顔をしたところを、再び一気に突き刺す。

「あぐっ……」

入れるタイミングを早くしたり遅くしたり、予測できないように奥を突く。

「……あっ……んっ、うくっ……はあん……っ」

俺の動きに合わせて、艶めかしい喘ぎが漏れる。

快感で訳が分からなくなってるみたいだ。

完全にコッチのペースになってきたな。

そろそろラストスパートいくか。俺は動きを早めた。

「あふっ、んうっ、あっ……ああんっ」

身体のぶつかり合う音がパンパンと響く。

どろどろに溶けたクリスの秘所から息子を引き抜く度に、あふれた蜜が滴り落ちていく。

で、出そうだ……だがもう少し頑張れ、俺！

「あっ、はうっ、あうんっ……」

俺は射精を我慢しながら、夢中で腰を振った。

陰茎がぎゅっと締め付けられてきて、内壁が擦れる。熱くて絡み付いてくるようだ。

亀頭も子宮口にゴリゴリ擦られて……うっ、も、もう駄目だ！

「出るっ、出るぞっ」

びゅるるるるるるっ。

俺はクリスの中に欲望を吐きだした。

「あ……ああっ！」

最後にクリスがビクビクと背を反らせる。

ペニスを引き抜くと、俺の形にポツコリと穴があいたクリスの蜜口から、血の混じっ

た俺の精液がごぼりと溢れ出た。

「う……」

クリスは熱い息を吐き出しながら、ぐったりしている。

俺はハンカチで汚れた陰部を拭いてやった。

少し赤く腫れた花びらの奥から、ピンク色になったゼリー状の白濁が零れてくる。

もう、いやらしい眺めだ……。

「まったく、よくも見事に中出ししてくれたものだ」

クリスが仰向けに寝転がったまま悪態をついた。

「はっは、悪イ」

俺は笑ってごまかした。クリスはしばらく黙っていたが、落ち着いた調子で言った。

「貴様……なぜ、最初から本気で戦わなかった？」

え。俺、最初から本気だったけど。

最後はエロパワーで勝っただけで……。

「……女相手に本気で勝負できるかよ」

とりあえず誤魔化しておこう。多少は本音だけど。

「ふん……そういうのはモテる男が使うセリフだ」

「う、うっせー」

「別に負けたのが悔しくて言ってるんじゃないぞ」

いや、思い切り悔しそうなんですけど。

「約束は約束だ。取り調べでは何も出なかったということにしといてやる」

なんか偉そうだな。いや、助けられたのか？

「あとは本人同士で解決してくれ。ちょっと悪漢やチェイサーや暗殺者に絞り上げられるかもしれないが」

「お、おい、何だよそれ」

「金で女を買うというのはそういうことだ」

クリスはのろのろと起きあがる。

「風俗女に貢いでることが知れたら、ウンバラの親が泣くぞ」

「よ、余計なお世話だっ」

うぐぐ……痛いところを突きやがる……。

「……PVPは疑似空間だからな、外に出れば処女膜は元通りだ」

な、なんだってえ！

てか、処女膜ってアンタ……な、萎える。

そしてビシッと俺を指差す。

「つまり残念ながら、オマエも素人童貞のままだ」

「な、なんで……」

なんで知ってるんだよ！

俺が愕然としていると、クリスはフツと笑った。

「やっぱりオマエはアホだな」

……ま、まさか、今のはカマ……。

「そんなだから年増女に騙されるんだ」

「うっせー、年増じゃねーし騙されてねー！」

「まあ良い、次は負けん。首を洗って待っているろ」

「次があるのかよ！」

見逃してくれるって言ったじゃねえか。

俺の叫びをよそに、クリスはPVPから消えた。

ひとり残された俺は、脱力して地に膝をついた。

はあ、散々な日だった。失恋の痛手もでかいし、ローグに締められるって……マジか？

ヤクザ出んのか？

ま、なんだかんだいってもアッチは凄かったよなあ。

PVP抜きで、また手合わせ願いたいぜ。

一ヶ月後。

ここはイズルードのPVPルーム、ヨーヨーモード。

「あのさ……」

ふと俺は、地に這いながら半裸で呻いている女聖騎士クルセイダーに尋ねる。

「あふ……んう、な、何だっ……?」

俺は四つん這いになったクリスの後ろから、犬の交尾よろしく肉棒を突き入れていた。相変わらずよく締まるなあ。

あれから、俺は雪辱戦といってコイツに何度も決闘を申し込まれたのだが、その度に勝っちまってこのザマだ。

「リベンジはいいけどさ……前より弱くなってねえ?」

「そ、そんなことは……んくっ」

苦痛なのか快楽なのか、クリスが顔を歪ませて呻く。

会う度に処女に戻ってるし、毎回痛いイヤじゃねーのかな。俺の息子も血だらけなんだが。

まさかこいつ、わざと負け……。

……。

ま、まあ……、
いつか。

二. 処女はコモドで捨てた

「いらっしやうい。安くしとくよ」

ここはコモド。

ミッドガッツ王国有数のサマー・リゾートだ。白い砂浜に青い海、あとヤシの木。周りを見ればべたべたひっついてるカップルばかり。その数、いつもの倍以上。

それもそのはず、今日はバレンタインデーなのだ。

ホテルはどれも満員だが、俺の手伝っているマッサージ店は閑散としている。

モンクお得意の気孔の技術を生かしてバイトを始めたのはいいが、今日はさっぱりだな。

まあ俺も、この後はプロンテラのお店でお気に入りプリちゃんに呼ばれてるからいいんだけどさ。きつと愛のこもった手作りチョコレートが俺を待っていることだろう。

入店料がバレンタインデー特別仕様で倍の料金なのが気になるが。あと、お金に困ってるって言ってたから、またお小遣いあげないとな！

「はあ」

俺は溜息をついて、店員用の休憩室に引っ込んだ。休憩室つってもマッサージ室の隅っこをすだれで仕切っただけの狭いスペースなんだけどよ。

呼び込みしても誰も来ないし、中で時間でも潰すかな。

と思ったら、ドアの開く音がした。

扉にぶら下げられた木彫りの装飾がカランカランと来客を告げる。

「いらっしやいませ」

すだれのスキマからそつと覗くと、悪魔のヘアバンドをつけた女上位聖騎士が入ってきて、壁にでかい槍を立てかけているのが見えた。

こんな日に女ひとりで来客かよ！

ま、こんな日に働いてる俺も人のことは言えないが。

しかし、この女……どこかで見た覚えが……。

「鎧だけ脱げばいいんだよな？」

そう言ってこちらを向いたその顔は、間違いなく知った顔だった。

流れるような黒髪に、獲物を狙う猛獣のごとく鋭い瞳……PVPに呼び出しては俺をボコボコにする凶暴な女クルセイダー、クリスだ。

つか、て、転生してたのか！

「はい、鎧だけで結構です」

俺は冷汗を流しながら、すだれ越しに声をかける。

女は慣れた手つきで鎧を脱ぎ、上半身だけ下着姿になると、ベッドにうつぶせになった。

向こうからはこっちの姿は見えないようになっていた。

俺は周りを見回し、慌てて壁に飾ってあったゴブリンの仮面を付けた。

「お、お待たせしました」

俺は深呼吸をしてから店に出る。

別に正体がばれても困らないんだが、毎回、蜂の巣にされているトラウマが……。

クリスは寝そべった体勢で顔を向け、仮面をつけた俺を見て訝しげな顔をしたが、そこには触れなかった。

「お前、その服はモンクだな。レベル上げに飽きてアルバイトか？」

「え、ええ、まあ。マッサージは自信ありますよ」

「そうであることを願うぞ」

クリスは不敵な笑みを浮かべる。相変わらずの貫禄だ。

「本日はどのへんがお疲れで？」

「肩と腰だ」

クリスはパラディンの鎧だけを脱ぎ、上半身はブラジャー（コイツ、下着の上に直接

鎧を着てるのか？、下半身はブラウンのミニスカートと黒のニーソックスといった姿だ。露出した背中と絶対領域がまぶしい。

うーん、随分とクルセイダーと違う衣装だな。まるでプパの脱皮だ。いや、孵化か。

「まったく……バレンタインだか何だか知らんが、人が多くてウザいな」
相変わらず口が悪いな。

「そうですね。今日はいつもの倍、混んでますよ」

俺は接客トークをしながら、クリスの肩を揉み始める。

……か、硬え。

男並みに身体を鍛えてやがる上に、すごい肩こりだ。なんだこりや、鎧を脱いでも鎧って感じだぜ。

「店は大繁盛かな」

「いえいえ、こっちはさっぱり」

カップルは自分たちでエロマッサージするから店には来ねえぜ。

「お前、チヨコはもらえたか？」

い、いきなりそれか。

「この後、一個だけもらえるアテがあります」

「家族からか？」

……コイツ、嫌なこと言うなあ。

「いいえ、一応違います」

「そうか、良かったな」

「お客さんは誰かにあげました？」

「私は世間の下らん行事には乗らん」

あ、そうですか。

俺はこっそり発動はっけいを發動しながら、凝り固まった筋肉をほぐしていく。肩に首筋、背中、と肌がうっすらとピンク色に染まっていく。

「……ん……」

時々、気持ちよさそうな吐息が漏れるのが聞こえる。

俺はさっと冗談っぽく聞いてみた。

「イベントに乗らないにしても、ちよつといいなつて思う男性とか、一人くらいはいるんじゃないですかあ？」

「気になる男か……」

ふん、とクリスは鼻息を吐く。

「どうしても倒さねばならない男がいる。気になるといえばそいつくらいか」
それ、明らかにチヨコをあげるような『気になる』相手じゃねーだろ。

「じゃー、お客さんはもっと強くなりたいですね」

「そういうことだ。恋愛などにうつつを抜かしている暇はない。まだまだ修行が足りんしな」

修行かよ。むしろ女の修行を俺はオススメするぜ。

俺はパラディンのミニスカートの上から臀部を手圧し始める。普通の女の子なら嫌がるところだが、コイツもさすがに少しぴくりとした。

引き締まった双丘を押すたびに、ミニスカートの裾が揺れる。うーん、いい眺めだ。ふと俺は、前回のPVPでのことを思い出した。

コイツ、今回もエロパンツはいてんのかな。

いや、風が吹いたらめくれそうなミニスカートの下にまさかそんな。普段からそんなのはいてたら……。

想像していたら、俺の愚息が首をもたげてきた。

「おい」

「は、はいっ」

突然の厳しい声色に俺は思わずビクツとした。

「お前、上手いな。どうもそこが痛くてな」

「え、ええ。ペコに乗っているとココが疲れますよね」

あーびっくりした。

俺は適当に流しながら、お尻の筋肉を揉みほぐしていく。本当は異性にあんまりやりたくないんだが、これだけ凝り固まってたらまあいいか。

「……っ」

ちよっとクリスが顔を歪めた。

「あ、痛かったですか？」

「いや、くすぐったかったただけだ。続けていい」

クリスの頬がうっすらと朱に染まり、トロンとした眼になってきた。気持ちよくなってきたらしいが、なんか寝そうだな。

「お客さん、お疲れですねえ」

「……うむ」

お尻をほぐし終わり、ゆっくりと太股に移動していく。

うわあ、ココも岩のように硬え。こりや大変だな……。

一生懸命ほぐしている間に、ゆっくりと時間が過ぎていく。

「……すう」

クリスが大人しくなったと思ったら、瞼を閉じて寝息をたてていた。こ、これは……。

いよおし！

客が寝たとなったら、マッサージ屋がすることはひとつだけ！

……サボるッ！

あ、ちなみにモロクだと荷物を盗まれるからよい子の皆は寝ないようにな。

俺は手を休めて柔軟運動を始めた。

ずーっと他人の身体を揉んでるんだから腕が疲れるぜ。

「……う……」

クリスが呻きながら身体をよじった。

そのまま寝返りをうとうとしたから、ベッドから落ちないように手伝ってやった。

が……。

ちようど手におさまるくらいのブラジャーのふくらみがぷるんと震え、思わず凝視した。

視線を下にやると、ほんの少しだけスカートがめくれて、太股がかなりきわどいところまで露出している。

クリスは全く起きる気配がない。

俺は思わず顔を近づけて覗き込んでいた。

仕事……ではあるが、男なら当然、気になるだろ！

俺はそつとスカートの生地の手端を指でつまんで、ゆっくりと上へと引き上げていく。今日はどんなパンツをはいてるのかな。

そこで目にしたものは……!!

女のふつくらとした股間、黒い茂みの下にうっすらと色づいた秘肉の花びらが見えた。それを覆うものは見あたらない。

……ノ、ノーパン!?

思わず俺は丘の上に手を沿わせ、ギョツとした。

こ、これは……目には見えないが、確かに『はいている』。指先に感触が伝わってくるのだ。

思い当たるのは……と、透明な布?

姿を消すオバケ、ウィスパ―が身につけてるやつだ。

随分と古典的な……いや、それを身につける人間がいるとは。いや、縫ってパンツにする奴のほうの問題か?

こういうときは、あれだ。

「ルアフ!!」

スキルを使うと、その下着は姿を現した。

純白のパンティ。

しかし、布の面積は恐ろしく小さい。コレ、V字型に食い込んでるんですけど。痛くねえのか？

しかも、中心がちよっと濡れて透けてる……。

俺は濡れた部分を指でなぞってみた。

じつとりとした感触が伝わってきて、つつくと染みが周りに広がっていった。

女の独特の匂いが鼻をついた。

……なんだこいつ、また濡らしてるのか。

PVPで誰かを殺ってきた後だったりしてな。

食い入るように眺めていると、ルアフの効果は切れてパンティが消えちゃった。

うーむ、見えないより見えたほうがエロい下着だな。

「ルアフ!!」

俺はまたスキルを使って、秘所を指で弄り始める。

透明な液が溢れる場所よりちよっと上、茂みをかき分けて膨らんだ突起を指で探る。

親指で下から上へと肉芽を愛撫する。

「……ん……」

クリスが甘い溜息をついたが、起きる気配はない。

俺は指を動かしながら、白い下着にじつとりと染みが広がっていくのを興奮しながら

見ていた。

擦っているうちに、クリトリスが大きさを増してきた。

花卉から蜜が滴っては、透明な布に吸い込まれていく。

ルアフが切れると、性器に水たまりができてるみたいに見えて変な感じだ。

くう、もう我慢できん。

俺はクリスの両足を抱き上げ、透明なパンティに手をかけると脱がし始めた。

「……んむ」

クリスが呻き、ゆっくりと瞼を開ける。

く、くそっ。起きちゃったか。

しかし、その気にさせればきつと前回のように……！

「な……何をッ？」

上半身を起こしかけ、寝ぼけた頭でクリスがわめく。

「お客様にバレンタインダーの特別サービスをですね」

そう言って、パンティの下に指を潜らせて花びらの間に指を滑らせる。

くちゅ、と濡れた感触とともに熱が伝わってくる。

そのまま蜜をクリトリスに撫でつけ、コリコリと指先で擦り上げる。

「……はひいっ」

クリスがビクンと背を反らし、起きあがりかけた身体をベッドの上につけた。

「あ、あうん……」

寝たまま愛撫をしてたから、寝起きも夢見心地で気持ちよさそうだな。

マッサージして血行がよくなってるし、感度はいつも以上のはずだ。

「き、貴様……」

クリスがぎっと睨みつけるが、既に涙目になっている。

「無料サービスですので、ご遠慮なさらず」

そのまま一気に指先を上下に動かし、クリトリスを一心に擦る。

「……や……ら、らめろ……」

怒りなのか羞恥心なのか、顔を真っ赤にしながらクリスが呻く。抗議の声も呂律が回らずに言えていない。

「……は……ひ、っちゃ……」

クリスの両足が小刻みに震え始めた。

念入りにマッサージしたから、力も入らない様子だ。

「お客様、どうぞ気持ちよくなって下さい」

「……ひっ……ひっ……ひっ……」

悲鳴をあげ、ビクビクッと身体を震わせて、クリスは気を達した。

ガクリと脱力すると、上気した身体をだらんとさせて、天井を見上げながら熱い息をハアハアとついている。

こうなるともう止まらない。

俺はブラジャーの下から指を差し入れて上にずらした。

ツンと上を向いたピンク色の乳首が露わになる。

さすがに感じて固くなってるな。

「お、おい……ひあっ」

指できゅっとつまみ、クリスの抗議の声を遮る。乳首を指の間にはさみ、手を広げてやわやわともみしだく。

「……っ」

片手を離してゆっくりと腹の上に掌を滑らせる。

マッサージで血行が良くなった体温が気持ちいい。

クリスは涙目になって感度の上がった身体をただピクピクと震わせている。

「お客様、宜しければ無料サービスがもっと受けられますが……」

断ってもやるつもりだけだな。

そして、再び下腹部へと指を這わせ、固くなった肉芽を乳首といっしょに指先でつねる。

「あうっ……」

頬を赤らめ、涙目のままでクリスは目をそらしながら言った。

「お……お願いする」

えええええええ、まじでー。

自分でやっという何だが、こんなに上手くいくとは思わなかった。

俺は指を伸ばして、一度イって蜜の溢れる花弁をかき分けてゆっくりと挿入していく。コイツ確か処女だからな、一応気を遣って……。

案の定、途中で引っかかってなかなか指が入らない。お腹の内側あたりで指をクイッと曲げると、クリスの背が跳ねた。

「お客様、ここが気持ちいいですか？」

ざらついた粘膜を指先でコリコリと擦る。

「……うあっ……あ……」

クリスはたまらなそうに身体をよじらせた。

「ここがいいんですね？」

指を抜き差し、そこを狙って容赦なく突き上げる。

「あひっ……あ……そこっ……へ、変……」

何度も指で突いていると、ねっとりとした愛液が指を伝って降りてきた。中は随分と

熱くなっていて、前回よりずっと感じているようだ。

「お客様、指を増やしますよ？」

G スポットを突きながら、指を二本、三本と増やしていく。膣内の引っかかる部分は段々となくなっていくた。

中で襷^{ひだ}が絡みつき、入り口あたりがきゅうつと指を締め付けてくる。

は、早く……入れたい……。

俺の息子はギンギンに直立していた。

「あーっ……うっ……んひいっ……」

クリスは嬌声をあげっぱなしだった。目尻から涙が零^{こぼ}れ、大きく開いた唇からは涎が垂れそえだ。

俺は指を抜くと、ズボンを下げてペニスを取り出す。

気づいたクリスがこちらを見たが、黒々と天を指す俺の宝刀を見ても、前のような悲鳴はあげなかった。

「お客様、ちよーっと痛いかもしれませんよ」

俺はベッドの上に行くと、ニーソックスに包まれたクリスの太股を大きく開き、ゆっくりと挿入していった。

先っぽが入ったあたりで何かが引っかったが、身体をよじって回転させながらズブ

ズブと突き入れた。

「……い、痛ッ……」

クリスが眉をしかめてベッドのシーツを掴んだ。

あ、やっぱ痛かったか。

それでも俺を突き放すような動作はせず、じっと耐えている。

ようし、慣れるまで突こうじゃないか！

俺は先端をGスポットに当てるように動かし始めた。

クリスは固く唇を結んで、獣のような呻きを漏らしている。何というか、気の強い女が眉間に皺をよせて痛みを堪える姿つても色っぽいもんだ。

変な趣味に目覚めそうだぜ。

俺が前後に動く度に、クリスとの結合部からは赤い液体が糸のように垂れ、絡みつき始めた。

何度もクリスの腹の内側を突き上げ、部屋の中には身体のかぶつきあう音と水音が響く。

「……あッ……」

やがて、クリスの声に艶色が混じり始めた。痛みと緊張で血の気の引いていた頬に、赤味が戻り始める。

「……んっ……あう……っ」

濡れた唇が開き、呻きが喘ぎに変化していく。

「お客様、痛みは引きましたか？」

「う……ああ……なんか、変な……」

「変な感じですか？」

俺は腰を引き寄せ、グイッと奥まで深く挿入する。

「ひあっ！」

クリスが悲鳴をあげた。

とはいっても、もう痛そうな表情ではない。

「……ううっ……んあ……あっ……」

そのまま前後に動かしていると、クリスが喘ぎを漏らし始めた。

「……ん……イイ……」

熱い息をつきながら、虚ろな瞳で呟く。

自分から腰を擦りつけてくるようになってきた。

そろそろ本気でいくかな。

俺は両手でクリスの腰を抱き寄せると、勢いよくピストン運動を始めた。

「……あひいっ……」

ガクガクとクリスの身体が震える。

「あっ……う、強いッ……」

目の前でクリスの乳房がふるふると揺れている。

そのうちのひとつに手を這わせ、揉みしだきながら、俺はクリスを突き上げた。

「ああっ……壊れるう……ッ」

クリスの膣内で、粘膜がぞわぞわと俺に絡みついてくる。

うう、気持ちいい。

も、もう出そうだ。

「お客様、出ますよッ？」

「あっ……やだっ……まだダメえっ……」

クリスが潤んだ目で叫ぶ。

ぐっ……。

俺は射精感をこらえ、ひたすら肉棒をクリスの中に突き立てる。

その間も、ねっとりとしたクリスの粘膜が俺を責め立てる。

「……いいっ……いいのおッ……」

激しく突き上げていると、クリスの中がぎゅうっと締め付けてきた。

熱い快感が身体を中心に走り抜け、膣内が小刻みに震えるのが分かった。

く、こ、これはもう無理だっつ。出るうっつ。

俺は息子を引き抜いた。

勢いよくペニスが揺れ、クリスの腹にビュビュッと大量の白濁を放出した。

「んあっ……!？」

クリスは呆然と自分の下腹部を見下ろしている。自分でも驚くくらいの量が出てしまった。

乱れた息を整えながら、クリスは指で精液をすくい、鼻先に近づけて言った。

「……すごい、変な……匂い……」

そして、舌先でペロリと舐めた。

うっ。

なんかエロいな。

「……まずい。塩からい」

そ、そうなのか。俺は舐めたことないが。

「おい」

突然、いつもの高圧的な言い方で呼ばれ、俺は反射的にかしこまって応えた。

「は、はいっ」

クリスは汚れた自分の腹を指さして言った。

「ブーツとするな。さっさと拭くものを持ってこい」
「か、かしこまりましたあ！」

数分後。

蒸したタオルで身体をキレイに拭き取り、元通りにパラインの鎧を着込んだクリスから俺はマッサージ料をもらっていた。

別に高くも安くもない、価格通りの料金だ。

いやー、ああいう思いをして金をもらうってのも悪い気がするな。へっへ。

クリスは立てかけていた槍を装備して俺を見た。

「さて」

変な間があった。

「お前には強姦罪が適用されるわけだが」

「……え」

俺はゴブ仮面の下でさあっと青ざめた。

そして、クリスが槍を構えると同時に、俺は殺気を感じて間合いを取っていた。
ま、まさかコイツ、わざと……。

クリスは腰につけた鞆から何か包みを出した。

バーサクでも飲むのかとおもいきや、それは可愛らしい包装紙にくるまれた茶色い塊……イチゴにチョコレートをかけたものだった。

それを一個、口に放り込んで味わいながら言う。

「冗談だ」

ま、まじでえええええええ。

そして、新たに一個を口にくわえると俺のほうに突き出した。

な、なんだ？

クリスは少し眉間に皺をよせた。

「気の利かない男だな。私からのサービスだ」

あ、俺にくれるのか……。

「す、すみません」

俺はクリスに近づき、仮面を外すと口移しでチョコレートを受け取った。生暖かくて柔らかな唇の感触、甘いイチゴとチョコレートの香り。

俺はちょっぴりドキドキしながら受け取る。

果実を噛む。って……イチゴ、すっぱっ。

ちよっとこれ、マジすっぱいんですけど！ 甘いチョコレートの酸っぱいイチゴって

合わねえ！ 嫌がらせ？

口をすぼめる俺をニヤニヤと見つめながら、クリスは言った。

「チョコレートと一緒に食べて酸っぱくない果実など、バナナくらいしかないのにな。コックは皆マニアックな味覚をしているのときか思えん」

そして、ぎらりと目を光らせて言った。

「そう思わんか？ ウムガⅡフムタン」

な、なぜ俺の名前をっ!?

……はっ！

口移し！ あれは仮面を外させる罠だったのか!?

俺が無言で青ざめていると、クリスは笑い出した。

な、なんなんだっ。

「くっく。お前がココで働いていることくらい把握していたさ。様子を見に来たただけだ」

え……。

「ちなみに今日、お前がもらえるチョコはその一個だけだ。お前がお気に入りプリちゃんのお店は、違法営業がバレて家宅搜索の真っ最中だ。今日は営業中止だな」

な、なんだって!?

「お前は商売女に次々と引っかかるから、捜査する側としては便利だ」

ひ、ひでえ……ああ……プリちゃん……。

クリスは店の扉を開ける。外はすっかり夕焼けに染まっている。コモドが一番綺麗な時間……だと俺は思う。

「ま、そんなわけで、今日も楽しませてもらった」

い、いや、楽しませてもらったつつつても、アンタ、処女……。今回はPVPじゃないから処女に戻らないぞ。

俺が戸惑っていると、クリスは憂いのある表情をした。

「……三十路近くで処女だなんて重いだけだ。お前にくれてやる」

……!? い、いや、そりやそうかもしれないけどよ。

……や、やっぱコイツ、分かんねー!

俺がまごまごしていると、クリスはいつもの偉そうな表情に戻ってニッと笑った。

「また会おう。次はできればホワイトデーあたりに」
ぶっ。

「わ、分かった。準備しておく」

クリスは戸口に繋いでいたペコペコに颯爽とまたがる。
が。

「……ぐっ!」

動きが一瞬止まり、眉間にシワを寄せて硬直している。

あっ、股間痛そう。

結構血が出てたもんな、てか処女って痛いのか……。

ジロジロ見てると、奴はこう言った。

「一応、義理じゃないからな」

「……はっ？」

一瞬、頭が真っ白になる。

クリスは夕焼けのせいかな、少し顔が赤らんで見えた。

「ま、本気でもないが」

そして、今回はペコに乗って去らずに、そのまま蝶の羽を握りつぶして姿を消した。
なっ……。

い、言い逃げかよ!?! 訳が分からねえ!

俺は呆然と立ちすくんでいた。

クリスがなくなった後も、口の中に、甘いチョコとすっぱいイチゴの後味が残っていた。

三、首はホワイトデーで捨てた

シュバルツバルド共和国の首都、リヒタルゼン。

その片隅にあるラブホテルの一室で、俺はとーっても筋肉質で強そうな悪漢男チェイサーに襟首を捕まれていた。

「人の女に手え出すたあ、いい度胸してんなあ？」

俺はチェイサーの手首を掴んで引きはがそうとしたが、力の違いで全然動かねえ。首が絞まる！ 絞まる！

出会い系掲示板で知り合ったプリちゃんの甘い言葉に誘われ、ホテルに入った途端にこれだ。

俺にも遂に春が！ と期待で胸と股間を膨らませていたのに泣けるぜ。プリちゃんを見ると、ゴメンネ☆って顔で笑っている。うう、俺、本当に騙されたんだ……。

「誠意見せるか、ボロ雑巾になるか、選んで貰おうか」

「誠意って……」

チェイサーがドスの効いた低い声で怒鳴る。

「ああ!? そうだな、¹百万^Mで見逃してやるよ」
誠意って金かよ。いま百万^Mも持ってねーぞ？

「そんな大金、持ってません！」

「ちっ……フルストリップ!!」

ずばばばっ。

チェイサーの手が動き、一瞬にして俺の＋7装備が脱がされる。下着以外、素っ裸になっってしまった。

「これで見逃してやんよ」

こ、これですって……俺、裸なんですけど！ 前にクリスが言ってたが、まさか本当にヤクザに絡まれるとは！

こんなことになるなら、言うことを聞いておけば……。

俺がそう悔やんだとき、突然、大きな音を立てて目の前に空間移動魔法が開いた。

な、なんだこりや。

と思つたら、中から女上位聖騎士バラディンと男上位聖職者ハイブリーストが出てきた。ああ、ここがポタメモ

だったのね。

……って、女はクリスじゃねーか！ なんでここに！

裸で慌てる俺を気にも留めず、クリスは叫んだ。

「プロンテラ騎士団・女性犯罪課、クリス・エルハートだつ。お前を美人局つつもたせの容疑で連行するっ」

わざわざ名乗るのか。これはもしかして、天の助け？

「ハア？ パラディンが俺を連行するって？」

戦って勝つ気満々なのか、心底馬鹿にした口調で言う。

それには応じず、クリスは女のほうに襲いかかった。

「女プリは男の経験値とチ○ポでも吸ってろ！」

下品な挑発が炸裂。うーん、万年ソロでレベル上げしている女の深い怨みを感じるぜ。
プリちゃんは奇襲に強打をかまされ、治癒する間もなく倒れた。騙されたとはいえ、
か弱いプリちゃん……。

チェイサーはそれを見て、クリスに襲いかかった。が。

「バジリカ守護壁!!」

緑色の障壁がクリスとチェイサーの間に張られ、攻撃は弾かれた。ハイプリーストの
バリアーだ。

チェイサーは舌打ちすると、部屋の窓から飛び降りた。

「逃がすかッ」

クリスが追って窓から飛び降りる。ここ、三階だぞ？

まあ、あいっじゃ死なないだろうけど。

残された俺は、クリスと一緒に来たハイプリーストを見る。

長い金髪をひとつに束ねた、白い聖衣がよく似合う優男だ。体が細いし、バジリカ使ってたから、支援型じゃなくて退魔型かも知れねえな。プリは男の俺から見ても格好いいと思う。ま、俺がハイプリになってもこうはならないけど。

ハイプリーストは床に伸びているプリちゃんに手錠と足枷をかけ、俺に言った。

「ご協力感謝します」

いや、協力してねえし。大方、クリスが俺を見張ってたんだと思うけどな。それより、俺、まだ裸……。

「ところで、クリスとはどういうご関係で？」

期待に満ちた目で男が俺を見る。

え……どういふと言われても。

そう言うお前こそ、どういう関係なんだっつーの。

「セフレだ、セフレ！」

抜群のタイミングで戻ってきたクリスが言った。

早っ。もう倒したのか？

クリスは手を合わせて俺とハイプリーストに言った。

「悪い！ チェイスウオークにハエの羽で逃げられた」

って、俺の装備は持ち逃げされたのか。ああ、こつこつ貯めた装備を失って一文無し

……。南^{なむ}無^むいぜ。

「その言い方は感心しませんね。貴女は未婚でしょう」

ハイプリーストがクリスに突っかかるが、俺は正直どうでもいい。装備を失ったシヨツクに比べれば。

「既婚だったらセフレ作ってもいいのか？」

しれっとした態度でクリスが言う。こいつは……。

「言葉尻を取らないで下さい。婚前交渉だなんて、神に仕える聖騎士として相^ふ応^さしくない行為ですよ」

婚前交渉って初めて聞く言葉だな。頭固えなあ。

「貴方は、クリスと結婚はしないんですか？」

真面目な顔をして男が俺に訊く。

いや、恋人ですらねえし。俺も真面目に訊いた。

「教会のいきおくれを押しつけようとしてないか」

「失礼な。彼女には家庭が必要なのです」

「まあPVP好きも女としてアレなのは分かるけどさ」

「バツシュ!!」

俺とハイプリの頭に一発ずつ、クリスの拳が直撃した。

「貴様ら、他人のことに口出しするな！」

うう、痛え。俺に口出しばかりしてる女が言うなって。

ハイブリを見たから見事に失神している。クリスはそいつとプリちゃんをペコペコに乗せ、俺に向き合った。

「またお前、あくどい商売女に引っかけてるのか」

「あくどくねえ！　なんでお前は俺のお気に入りのコを片端から連れて行くんだっ」

「それは逆だ。お前が悪い女ばかりに惚れてるんだ」

「悪い女じゃねえって！」

「お前が無一文でもそばに居てくれるような女か？」

うっ。それは。

「まあ、これを機会に悪徳風俗店めぐりから足を洗え」

そ……そりゃ、今はそんな金もないけどさ。

「この後、暇だったら私に付き合わないか？」

「悪いがそんな気分じゃねえぜ」

はあ、プリちゃん……俺の装備……。

落ち込んでいる俺の上から声が降る。

「お前、一週間前が何の日だったか知ってるか？」

「知るかよ」

「……ん？ 一週間前？」

そういえば、お店でプリちゃんにねだられて高いプレゼントを贈ったなあ。あれ、なんかの記念日だったけ？

あ。

俺は青ざめた。

「ホワイトデーだ！」

「うむ」

「わ、悪い。チョコもらってたのに忘れてたわ」

やっべ、今、金ねーぞ？

「お返しはマッサージ一年無料券でいいぞ」

チョコ一個のお礼にしては高くないか。

「エロマッサージもしていいなら喜んでやるけど」

「……冗談だ。それより、ちょっと付き合ってくれ」

「何に付き合うんだ？」

クリスにはにこやかな笑顔で言った。

「PVPだ」

エロシーンサンプル

「そら、お前が見たがってた下着だ」

クリスは膝立ちして俺の顔の上をまたぎ、スカートの中を見せる。紫色の、艶々とした光沢のある薄いパンツを穿いていた。いつもながら面積は少なく、陰毛や陰核の輪郭が分かるくらいにぴったりと肌に貼り付いている。そして、谷間の中心は愛液で色が濃くなっていた。

「中も見たいか？」

俺は夢中で首を縦に振った。

クリスは指先を下着のクロッチにかけ、少しずつずらしていく。細い銀色の糸を引きながら、薄桃色の花弁と、ねっとり湿って温かそうな肉壁が見えた。

射精した俺の宝刀が、再び頭をもたげてきた。

「な、なあ。舐めてイイか？」

「……舐めたいのなら、舐めさせてやってもいいぞ」

偉そうにそう言ったものの、少し戸惑っているようだった。まあ、舐められたことがないんだろな。

俺は両手でクリスの腰を掴んで引き寄せると、透明な液に満ちた泉に吸い付いた。

汗と愛液の混ざった、甘酸っぱい味が口内に広がる。

「……っ……」

クリスが息を飲む。

舌を伸ばして花弁をまさぐり、溢れてくる蜜を味わう。
クリスの足がぶるぶると震えているのが伝わってくる。

何も言わないってのは嫌がってないんだろう。

「……あっ……」

皮の上から肉芽をつつくと、小さな声があがった。

俺は両手の指でクリスの花弁を押し広げ、ついでに陰核の皮を剥いた。

「痛っ……」

クリスが呻く。

剥きだした真珠をいたわるように、舌で俺の唾液をたつぷりと塗りつけていく。ぬめる陰核を尖らせた舌尖で叩くと、クリスがピクリと動いた。

「んう……」

反応のいいそこを、勢いよく何度も撫で上げる。

「あふ……や、やめ……」

四、財産は女で捨てた

立派なモンクを目指してウンバラから出て数年。

とうとう俺にも恋人ができた。

先に言うておくが、重装備で槍をブンブン振り回すような暴力女のクリスではない。恥ずかしがり屋で可憐でちよつとエッチなプリちゃんだ。俺とプリちゃんは臨時で出会い、何度も一緒にレベル上げをしてるうちに惹かれ合い……遂に、婚約した。

「忘れられないような結婚式がしたいの。レベル 99 になって、二人でオーラを出しながら結婚しましょ？」

プリちゃんの言葉に、俺は二つ返事をした。

貧弱な装備しかないプリちゃんに、俺は装備を丸ごと貸した。結婚したら奥さんがお金を管理するようになるということで、お金も全部プリちゃんに渡した。もちろん、大切な結婚資金もプリちゃんに預かって貰っている。

俺達はペアで狩場に籠もり、レベルが上がって喜んだりデスペナルティを喰らってケンカしたりしながら、ようやく二人で発光するまでになった。ラブラブだ。

そして、いよいよ今日が結婚式。

……なのだが、待ち合わせ場所の教会でプリちゃんを待って一週間が経った。

何度も連絡をしたが繋がらない。嫌な予感がよぎる。

うーん……これは……まさか……。

何か事件に巻き込まれて、今頃俺の助けを求めながら泣いてるんじゃないかっ!?

俺は次取るべき行動を考えた。まず手がかりから探さねばならない。プリちゃん、どうか無事でいてくれ!

「おや、ウムガじゃないか」

俺は顔を上げた。ペコペコにまたがり、過剰精錬の槍を背負った暴力パラディン、クリスだった。頬が少し上気している。またPVPで誰かを殺ってきたんだろうか。

あれ? コイツ、髪型変わってら。長い黒髪を切って、薄紫色のサラサラショートになっている。悪魔のヘアバンドは相変わらずだが。

「久々だな。……と言いたいところだが、急いでいるのでまた後でな」

そう言って、甲冑をガチャガチャ鳴らしながら教会の奥の部屋へと消えていった。相変わらず貫禄のある女だ。

俺はその背中を見送り、目を疑った。

クリスの後ろには、手錠に足枷を付けられた女ハイプリーストがぐったりとした姿で乗せられていた。その顔は、なんと、俺のプリちゃんじゃないか!

「お、おい、プリちゃんっ」

五、涙は少女時代で捨てた

エロシーンサンプル

クリスは笑いながら下へ移動して、俺の股間に顔を埋める。ズボンのチャックを外し、既に固くなっている俺の息子を取り出す。まさか……。

「……あ」

突然、クリスが舌を出して俺の先端を舐めた。強く吸い付かれて、思わず声が出てしまった。先端を口に含んだまま、くすぐるように舌先で鈴口を責める。

好きな子に舐められるってのはそれだけで興奮する。

下半身にどっと血と劣情が流れ込む。堅さを増した肉棒から口を離し、今度は裏筋を下から上へと丁寧な舐め上げられる。クリスは上目遣いで聞いた。

「なあ、これって気持ちいいのか？」

俺は甘い疼きに堪えながら、無心に陰茎を舐めているクリスに応えた。

「ああ。なんかお前、上手いな」

クリスが顔を上げる。その口元から、唾液だか我慢汁だかの糸が垂れるのを見て、思わずドキリとする。

「勉強したからな」

「えっ。ど、どうやって……」

ま、まさか、誰かと……。

「腐女子の友達がいてな。借りたホモ本にそういうネタがいっぱい載ってた。特にフェラシーンが多くて」

ポーズスラブ
BLエロ本かよ！

「GVGで捕虜になった男モンクが輪姦されてたぞ」

「内容まで言わなくていいっ」

クリスが俺の息子を手の中でふにふにしている。

「あ……すまん、萎えたな」

……まあな……。

クリスは再び俺のモノを咥える。

さっきまでは舐めているだけだったのに、舌先を尖らせてカリ首を刺激したり、唇で吸い付いたり、少しずつ変化をつけてフェラチオをする。

おかげで、すっかりもとの堅さに戻っちまった。

俺はクリスのドレスの裾に手を伸ばし、めくり上げる。

純白の総レースのパンツが見えた。布が少なくて肌に食い込んでいる上に、肌が透け

ている。

下着もドレスに合わせてんだな。可愛いじゃないか。

俺は身体の向きを変え、クリスの太ももに顔を埋めた。

パンツは既にぐっしよりと濡れ、下着の上から膨らんだクリトリスの形が分かる。俺はそこに吸い付いた。

「ひゃん」

「なんでこんなに濡れてるんだよ」

クリスは俺の息子をくわえたまま、頬を赤らめる。

「……だって、初夜だからな」

俺はクロツチの部分を指で引く張ると、露出させた真珠に直接吸い付いた。ちゅくつちゅくつ、と水音を立てながら、強弱を付けて吸い付き、舐め回す。

「……あ……んう……」

気持ちよさで頭が朦朧としているのか、クリスの手が止まったままだ。

「……や、やめろ……舐められない……」

続きは本編で！



四畳半文庫

処女は PVP で捨てた 体験版

2007 年 12 月 31 日 初版発行 [C73]

2008 年 3 月 9 日 ダウンロード版発行

2026 年 7 月吉日 文庫版電子書籍発行

発行者 四条

発行所 四畳半

Email 4j@4johan.me

Twitter @4johan

Special thanks to あさぎりえいじ様

18 歳未満の方の閲覧・所持を禁止します。当コンテンツの再利用(転載・配布等)は禁止しています。当作品はフィクションであり、実在するキャラクター等とは関係ありません。現代ではコンプラ的に宜しくない表現がありますが、当手を反映したものとしてそのまま掲載しており、これを助長する意図はありません。

(c)2007 GungHo Online Entertainment, Inc. & Gravity Co. Ltd. & Lee Myoung Jin (studio DTDS) All rights reserved.

RagnarokOnline FanNovel For Adult
♂MONKX ♀PALADINE EroComedy
2007 Winter : Yojohan Presents

